

抄録の書き方の手順

報告する順番

1. タイトル
2. 著者の氏名、所属
3. はじめに
4. 症例
 - 4-1 依頼者情報（氏名、性別、年齢、職業、生活歴、身長、体重、初回日等）
※氏名はフルネームではなくイニシャルあるいは〇木〇子のように略語で扱ってください。
 - 4-2 症状（初回主訴、家族歴、既往歴、現病歴、現症）
 - 4-3 検査
 - 4-4 所見
 - 4-5 経過（施療方法、施療計画、施療回数、予後）
5. 結果
6. 考察
7. 結語・まとめ
8. 参考文献（引用した文献や論文があれば載せる）

※「方法」、「経過」、「結果」から書き始めると書きやすいと思います。これは自分の経験からも比較的筆が進みやすいのです。また結果がまとめれば、そこから考察も引き出されますし、考察を書けば自分の研究の意味、独自性も自ずと明らかになり「はじめに」も書きやすくなります。

実際の症例報告を基に進めましょう

1. タイトル

一番伝えたい内容を凝縮して簡潔なフレーズで表したものです。

※1：長いタイトルは避け、20文字以内にとどめる方が良いです。

主題で表現しきれない場合は、副題を付けて下さい。

※2：一目見て内容が伝わるかどうかイメージしてください。

※3：原稿の下書きをすすめると、症例の中で気づいたことを全て書きたくなります。

全て書いてしまうと、一番伝えたい内容がぼやけてしまいます。一番伝えたい内容が表されているタイトルを考えましょう。

（例文） 『弾発指の固定法について』 『脊柱のアライメント調整法についての一考案』
『顎関節症の整復法について』

2. 著者の氏名、所属

研究活動に参加した者の氏名と職場及び所属している研究機関を書きます。

※：所属は一つに限ります。接骨院に勤務していながら、大学院にも通っていたとします。この研究を、大学院の研究の一部として行ったものである場合は、大学院の名称を所属とします。

（例文） 大阪 太郎（太郎接骨院）

3. はじめに

症例報告の目的を記入します。

※1：目的は、端的な言葉づかいで書くことがポイントです。目的の前置きや前提は最低限の単語で単純にして、目的を明快に表すようにまとめます。

※2：例文のように長い文章を特別必要としませんが、研究や省令発表に至る背景や目的などを記載して下さい。

(例文) 現在の低酸素性虚血性脳症などによる小児の機能障害は例年出生1000人に1～3人の割合で発生しており、今後も一定割合で発生するであろうと推測される。しかし、現在の出生児に発生したアクシデントにより機能障害を負った小児に対するアプローチは少なく、いったん脳性麻痺の病態を起こすと現代の医学において有効な治療法はなく症状固定を宣告される小児は少なくないであろう。

しかし、今回の症例の様に低酸素性虚血性脳症などによる不可逆性の機能障害を負った小児がカイロプラクティックのテクニックのモーションパルペーションと視覚からの入力により機能改善が見られる事から、小児の身体機能の改善においてモーションパルペーションや視覚からの入力は有効であり、脳の神経回路のつなぎ換えが促進された事が示唆される例を報告する。

4. 症 例

4-1 依頼者情報（氏名、性別、年齢、職業、生活歴、身長、体重、初回日等）

依頼者の診療調査票の基礎データを示します。

※：プライバシーの保護で個人が特定できないように、氏名の頭文字をアルファベット表記にします。写真を用いる場合、少なくとも両眼を隠す必要があります。

(例文) 依頼者情報：T.M 50歳 女性、主婦

4-2 症状（初回主訴、家族歴、既往歴、現病歴、現症）

来院時、既存の医療機関で診断されている場合は、診断名を明記します。

来院理由、依頼者の訴えをそのまま記載します。VASのような痛みスコア評価を取り入れるとなお良いです。依頼者が今までかかった病気を内科、外科精神科にわけて記載すると分かりやすいです。発症以前の健康状態を含めて発症後から現在までの症状を推移します。現在の症状（自覚症状・他覚症状）

(例文)

主 訴：右頸部痛

症状の推移：ダンスの練習中に右に首を振った際に右頸部痛及び回転性眩暈が発生した。

既 往 歴：5年前に交通事故にて鞭打ちになり、整形外科にて診断される。

4-3 検査

柔道整復師の視点から、必要と思われる検査結果を記載します。

※：検査はできるだけ定量的で普遍的なものを取り入れ、施術後に再評価できる項目が望ましいです。神経学的検査・運動学的検査・徒手筋力検査・アライメント等を記載します。

4-4 所見

検査結果を元にどのように判断したのかを示します。

(例文) 徒手検査により腱反射の減弱はあったが筋力の低下や皮膚知覚には症状がなく軟部組織の腫脹による軽微な神経圧迫があると判断し、周辺組織の腫脹の改善により症状の改善が推測される。

4-5 経過 (施療方法、施療計画、施療回数、予後)

「施療方法」、「施療計画」によってどのような施療計画を立て、どのような施療を行ったかを示します。

※：方法は～法と明記後、解剖学的、運動学的、神経学的に表現すると、他職種
の聴衆にも分かりやすいです。施術回数は数回から数十回に渡ることがある
場合は、大きく変化が出た時や、新しい方法を試した時は、施術記録に記載
すると分かりやすいです。

5. 結果

「施療計画」、「施療方法」によって施術を行った最終的な結果を示します。

※：結果は、症例の一部として「経過および結果」と記載しても良いです。

6. 考察

症例の結果から考えられることを述べて下さい。

7. 結語・まとめ

「はじめに」、「経過」、「結果」、「考察」を簡潔にまとめて述べます。得られた知見や結果を箇条書きにして一括提示すると分かりやすいです。

8. 引用文献

本文中に、上付き文字で番号を振った参考文献による引用箇所に対して、参考文献を番号順に記載します。